

夜吹雪

白い胸当てができるほどの雪花の舞
灯りに飛び込むように降りしきる

きららがみ
雲母紙に描かれた ここは何処

傘を忘れた僕は傘のひしめきの間を
吹きつける氷粒にむせながらすり抜けてゆく
白い風に包まれ、肩を抱かれながら

散り消える白息は儂いところの名残り
吹きだまりでふと立止まれば
胸の想いまで吸い込まれる静けさ

見上げれば追憶の奥から絶え間なく
ひっそりと落ちてくる結晶のひとつぶ、ひとつぶ
そっと手を擦り合わせる僕を微笑ませるように

凍えるまでこうして立ちつくしていようか・・・
でも、君の哀しみが降りしきるのなら
もし、君も降りしきる中に居るのなら

埋れそうになった残り火をかき立てて
灯りもないうすあおい風景の中へと

足元を探り、希いを探り、^{いのち}生命を探り・・・

(1984.2.17)